惰野集

春上

特別
イ4
3163
31(1)

貴
14
3163
3T(1)

拾遺集乃序

吾友清原の雅風のいてゝくゆゑに
世ゝの歌よ毫をまうくるもたのゝ
さゝめを仮に影をゆくもの
いてゝきゝよりこのまゝにふるゝ毫
詠をかゝせゝ毫よハたきこのゝ

ふくかぜたかねにのこるれい
うらみをのこすふるさとの
影なのつゆはたれるさの海のあか
月ぬるを風ぐしはのかて第
紫紫の雲をぬきとめく後の髪かれ
ゆるるよやのく後の影を去れて

花のくれきぬさねたにこのみのく
もらひまるひのそれ松あるるおそ山
紅葉の前をそ海のなごりまつ後の
世の色よきこよのあをあをあ山をる
るまきこるのかくまねたてる古そ六帖か
ほる色をそはくらあれたそあ名

かのきるゝはらぬをやさて古さる物と
まらんあけくるをんくさしてのこゝろゝ
めをてどくさいらあつまを使すとてあむ
ちのけゝくゝくけゝくゝおゝんゝハ
ゝれをつけては書をゝかてゝこゝ
をゝくゝこゝるゝゝひ浴のこゝまいとゝんん

ゝゝあ保ゆれハゝゝみゝ性雅集ふつゝあ
かゝゝ名つゝるゝゝのゝゝゝまゝゝふゝの東ゝゝ
おをゝゝゝれゝゝゝれゝゝるゝゝ市ゝゝひゝ
ゝゝゝおゝれハおゝゝゝるゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝゝまをゝゝゝゝゝゝ人ゝを風のゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

有ときこゆるまでのるゝおのゝ
秋の夕のあはれなるこゝちもそ
はるとをもしたんとやさてかく歌をのの
ものとゝりしるるをんなゝの形ゝ次かの歌
ゆゑとゝふまでもゝひとをゝとゝるゝ
ものなるけれの歌ハ一ゝ人の歌

おなじのゝ草ふかあれはよゝ人のゝをとを
見るなかゝくゝ乳ゝ好てゝゝて考て
みやひみるこゝろをこゝれとゝをゝ深くゝ
はゝてゝをハゝ人のゝをゝるゝ思ひ
詞ハ中ゝのなゝるゝの乳ゝの歌ハ中
みゝとゝるゝはゝきゝとりてよみ出ゝ

あらかじめきわまれこゝろのつくてゝ
いさゝかのあらそうをまぬかれおくるなき
あわけるえんこうまみれ日つくるのね
ゝりあるもゝのふ蔭こゝろ

凡例

古今をゑん合せんあらそうとそろへくさつえ
これい例をとらへつきあるねとたのよるあり
たるきこゝろおもひたるもゝのもゝあたるん
なるひゝてゝる歌詠をゝもせん時をもかへつき彩乃
つゝふゝとおもひせゝれぬをけゝるあきおゝとあきいゝう
こゝる雲おゝるをもこれゝをきかよりこゝんこゝろにもゝてこれ
つゝてゝるに歌詠をゝんこゝとをゝるゝをゝこゝゝゝまて
組合せをゝとをゝる歌の数も限なくおゝるゝるなきな
をゝゝあゝこゝまゝ歌のねこゝきゝこゝゝのゝよゝこゝるをい

本集よりえらびて異類の歌をもつてまぜり
等類集をいま歌をんなまぜつるをよにひとと
のやうにかんなをむすびさるは等類集の中にも
詠花詠月まことにのこるものあるをもて歌おほく
をかにも歌をなほうもつてつくるとおもひまぎれい
しなくへるをもんをける
歌の名を古集よりあつめて中ごろまでの
もまれもえるたぐひうまんるをゆるをはきな
この記をかつてつくるもの外にも業時面をも
やうにかんなるものあるたぐひの物にもあるべきなり

もあるまことをつくれをたづねるべきことはいとく雅例を引
他者名をへて異記やるべきことにおもんを
おかること本集まることうたをあつめたるの例を引ひも
つるをそれの省略よるるはほんんようの猫書
のうちめもとりんとおもひをいの僧名をいさかる
さるをほまるをつるぬるをてつまひるをせんんを
いつをもを本集にこうふ
法文まこと偈の句歌をもくことをまつるをこの中
集上つ代をたねとつて釈教部をるさる後
指遺集をもとより釋教の歌も類をとるてのもれ

たれは捜きうんよ雑きるすきみるへし古寺山ち
等れ影乃ふるとこてこてよ出やう
時この鳴りけけき等のあるまるみ出るやうに
一夜ゑるとさやうよんゆうちるるきくちきを子
くてう等れ物を四のはようわきたきてうれる弁に
ちうのうよるるるれ物ちるるのあれきれはうも
りうよて古くく秋よみたこうもおく梅の花雪
きるの十二月むりのうくはみくまい等紅等神
なりのうて雪のうをあまねきまおくその外れれ
ゑへりうう舟よ葉ゑ等みれりうめむりうのきれ

まうせて秋よひうきれんえ古等まをを梅の
やうよ等秋をへるをはうぬふんりうきう
ゑるへきうるうれうへをるうんりて古ふの弁まる
みをれるれふりのうをはゑうれうへく
けるうきうんるれへう等の物をよりの射にうわ
きうるけうこの角きいけをうりてみうはるう
取うをるをまくこうれうはをれよりきを時
ときのけうめうれりうこうはをれよりきを時
うりうまおうるるをうれんい弁をうう
けう等ゑうるへきうるうるるものう
けう等ゑうこ古ふ等よふりうるは等ひうてはい

やたの秋をあはれとおもふこころ

月の影四季まのあたりなれども春夏とみの新たなる

いつれのときかいつきえなんと思て秋の月は新

月をまつるもとんとみ今の人乃ようにたるも

秋の影なるに月とのみいひて秋のとせまきをはとし

てをもはゆるをたまはるまゝに人をあるは

詠まさるへきものとこそおもへ集中もまた秋

の題なく新の月よりはるかに秋よりはるかに人のこと

にく秋よ組なとる月はおもふはあ秋の意我

ちめてよむ角きるにもたること乃例とふるを

ゑもあるのはへ

歌ハをちなをもとのみなるをいはるとと

おほすき限をひ法ハとり集を書取あること

ちとの新原まをもはるるこはつるあやき

分にうてるのきうの角より見出すをすて

ゑをハきをさるもいるに今まるこの集よ

ゆせるこをさる角きふ集なとるの七尋なく増補

すあるに於遺ちともたをまくおもへるいこはちう

なんをもつはなきを

清原雄風

万　萬葉集　こいそのうらのうつせみのつるまもとめぬよりをつみおき
てしとゝのまもせてもとり拾うねて　新採百首
千歌　萬葉集佳調　佳調拾遺等をはせて
うらのうつろもきやさゝなみのうをあるつ

古　古々集　後　後撰集　拾　拾遺集　後拾　後拾遺集

金　金葉集　詞　詞花集　千　千載集　新　新古々集

勅　勅撰集　月　月清集　續詞　續詞花集　代　萬代集

六　古々六帖　或人のおくにさよいるあくさとあきかぜもあきまれにふるいつもさとるも

以集板よりえらるゝものとうしろあつふんのたまうちかせ
おさうるにいと後まとしたあるは花を集とうるもと通用
なるなるにあるはるとくゝ越さうるやうのもうるを
今又拾補もみよとうるあるもせんてい
てふれせんとてことゝさんそのまゝまくさ一ぬ

年内立春　元日　元日雪　山家元日
郊外　若水　門松　春從東來　幽栖喜來
雪中喜來　寒過春來　臨河客　立春　立春
立喜日　立喜雪　立春風　立喜霞　海邊立春
立春江　立喜湖　立春池　立春川
立喜水　立喜山　立春花　山家立春　閑中立喜
名所立喜　立春祝　故郷立喜　初春霞　初喜山
山家初喜　里初春　野初春　初喜河　初春雪
初春衣　早喜　早春朝　早春雪　早喜風
早喜霞　早春月　早春湖　河早喜　澤早春
早春山　山家早喜　故郷早喜　雪早春　早春雪

早春待花　早春興　春水　春到氷解
滝音知春　氷消田地　春風解氷　白馬節會子日
子日松　子日小松　雪中子日　南豆子日
野子日　禁中子日　所々子日　子日催興
子日述懷　霞　霞知春　懸帯　霞
春興霞　朝霞　夕霞　空霞
山路霞　嶺霞　山霞　遠山霞
霞隔遠山　霞隔山樹　霞隔山　霞隔遠山
原霞　行路霞　里霞　野霞
名所霞　社頭霞　閑路霞　羇旅霞
水郷霞　霞隔水郷　霞隔古寺　都霞　故郷霞
海邊霞　霞隔浦　晩霞隔浦
海路霞　霞隔行舟　河邊霞　湖上霞　江上霞
橋上霞　檜原霞　霞隔松　霞隔遠樹　松上霞
霞春衣　寄霞述懷　寄霞懷舊　霞隔松　霞懷
久待鶯　待鶯　春菜鶯遠　早鶯　待鶯
聞鶯　鶯之聞鶯　鶯初聞鶯　鶯初春　鶯聞
山鶯告春　古巣鶯　鶯告春　鶯出谷　谷鶯
雨中鶯　霞中鶯　雪中鶯　曉鶯　朝鶯
山鶯　山家鶯　曙鶯　野鶯　野亭鶯
籠中鶯　行路鶯　野鶯　閑居鶯　閑居鶯
樹間鶯　梅間鶯　竹林鶯　鶯啼梅　里鶯
花中鶯　鶯遍　暮春鶯　春情生鶯　鶯囀　柳上鶯

寄雪述懷　若菜
野若菜　原若菜
名所若菜　故郷若菜
春雪　山春雪
江春雪　春雪似花
野外雪　山家殘雪
樹陰殘雪　殘雪似花
山路雪　梅
梅初咲　依梅知春
梅似雪　雨中梅
依風知梅　梅薫夜風

摘若菜　贈人若菜　雪中若菜
儀若菜　澤若菜　田若菜
見春採若菜　寄若菜視　寄若菜述懷
野春雪　岳春雪　末春雪
春雪欲消　寄春雪述懷　殘雪
故郷殘雪　草殘雪　木殘雪
山殘雪　餘寒　降空月
待梅　栽梅　若木梅
梅盛　梅花春久　雪中梅
梅風　梅薫　依梅待風
梅香　梅花久薫　梅花遠薫

梅香何方　梅薫袖　梅近袖香
梅花染衣　梅薫枕　梅香八重
夜梅　閑夜梅　夜梅尋香知
朝梅　夕梅　月前梅
社頭梅　古宮梅　古宅梅花
鷹端梅　庭梅　垣梅
旅宿梅　行路梅　梅香妨道
紅閨梅　名所梅　梅花移水
見梅　獨見梅　依梅待人
梅花聚人　梅花留客　梅頭梅
號梅花　憐梅　愛梅

梅香袖　梅近袖香　梅香留袖
梅花移袖　梅花夜芳　梅夜薫
梅香移水　梅花所々　梅花殘家
梅近客　園梅　野梅
梅香妨道　梅花雖家　水辺梅花
梅開得客　山家梅　梅開得客
折梅　故郷梅　折梅贈人
惜梅花　梅花不異月　梅花將散
梅花移水　禁庭梅　
梅花近客　曙梅　

落梅　閑庭落梅　水邊落梅　梅花浮水　梅花落衣
二月雪落衣　紅梅　紅梅盛　雪中紅梅　紅梅白梅香異
寄梅懷古　寄梅懷舊　柳花　柳絮　柳絮
古柳　雨中柳　柳霧似玉　霞間柳　夜柳
柳風　柳風靜　柳亂風　柳糸隨風　禁庭柳
閑岳柳　山家柳　故鄉柳　水邊柳　何處柳
池邊柳　柳臨池水　柳拂池水　柳糸映水　柳
谷柳　行路柳　近柳　遠柳　柳糸
柳垂糸　柳頭柳　亂柳　芳草　春草
雨中芳草　垣根芳草　山家芳草　野芳草　野草綠
蕨　早蕨　野蕨　山蕨　春夜月

春夜待月　江上春月　不明不暗朧月　春曙序　霞隔月
春山月　春曙　春曙雲　春山曙　山家春曙
山岳春曙　遠村春曙　海邊春曙　夕春雨
夜春雨　山春雨　林下春雨　野春雨　行路春雨
旅春雨　閑中春雨　寄春雨懷　歸雁　春鶯
花落鶯　雁別花　歸雁忙　雨中歸雁　霞中鶯
霞歸雁哀　雲間鶯　暮天鶯　深交鶯　曙鶯
月前鶯　歸雁似字　歸雁幽　鶯遷　遠歸雁
歸鶯少　遠近鶯　峯歸雁　海歸雁　浦鶯
田歸雁　田里歸雁　罷歸中鶯　行路鶯　都歸雁
歸雁契秋　春駒　牧春駒　野春駒

原春駒　澤邊春駒　雉　野雉
燒野雉　原雉　雲雀　呼子鳥　野雉
夜半呼子鳥　山呼子鳥　朝呼子鳥　森呼子鳥　夕呼子鳥
暮春呼子鳥　花　櫻花　老木櫻　深山呼子鳥
花櫻　雜櫻　散残櫻　待春　山里櫻
對山待花　山家待春　閑中待花　待花日暮　斷待花
山花遲　山寒花遲　山家花遲　待花遲所　待花遲所
尋花　尋山花　遠尋山花　栽花　老後栽花
見原山春　雲之尋花　尋花不定雲　山路見花　遠尋花
尋花遠行　尋花日暮　雨中尋春　遠樵支間花　見見春
遠見見春　初花　花初開　山初春　山花初綻

山花始開　始見山花　待侍春一枝　花所似美人　花盛
山花盛　名所花盛　庭花盛　見花　見盛花
月前見春　花下見月　夢見花　靜見花　朝見春
無朝見花　遠日見花　終日見花　見花日暮　常見花
每春見春　年之見春　每年見春　見春忘歸　見山花
翫山見花　遠見山花　旅中見春　行路見花　馬上見春
名所見花　入隣家見春　見花不掛庭　独見花　老見花
見花忘身　見花思昔　思家花　思山花　思都花
思禁庭花　思故郷花　所之思花　遠思山花　遠思花
思山里花　夜思山花　畫夜思花　遠思花　老思花
翫花　翫山花　終日翫山花　禁中翫春　見南殿櫻

雨中翫花　翫花經年　毎年翫花　老翫花　愛花
禁庭愛花　毎年愛花　憐花　花不飽　心不飽花
獨花　對花　獨對花　對花忘人　對花思昔
折花　月前折花　毎朝折花　毎年折花　折花贈人
折花贈來　近花　遠花　遠花離家　遥見人家花便入
寄天花　月前花　花下明月　花色不異月　月入花灘晴
寄雪花　花雪　花似雪　寄風花　風前花
花隨風　風輕花芳　花香隨風　花薫風　花厭風
對花厭風　依花厭風　依花恨風　霞中花　霞中花薫
霞隔花　依花厭霞　花透霞　寄雲花　花雲
花似雲　遠花如雲　晩時厭雲　雲間花

怜野集巻之一

春之部上

年内立春

万　月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春たちぬとか　家持
古　年の内に春はきにけりひとゝせをこぞとやいはん今年とやいはん　元方
勅　年ふればおのが老へと白露の…年のうちに咲る梅が香　寛平御時
今　あらたまの年も暮ねば立霞…知人ぞしる　忠岑
六　年の内に春たちぬとや吉野山霞かゝれる峯のしら雪　貫之
月　年の内に春たちぬとや…山霞ゝれる峰のしら雪　後実
〃　冬の内に春はきにけり…なる年に春といふ名で春は来にけり　重之女
〃　くれはてぬ年に春とや…　頼輔
〃　年の内に春はきぬれどなほ…日数をかぞふる　長方
古　新しき年の始にかくしこそちとせをかけて楽しき終め　大弐
後拾　いかにしてとくるあしたにかくとぞ…　小大君
勅　冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける　信実

元日

元日雪

元日當山家元日杖若れ

門松春風来幽栖春来雪ぞ美来

寒國諸會家持駅季

作者知

小海赤彦南小谷玉木改補尹

法性寺入道俊成

飛後

俊頼

呼関

関白

二条后

寒ゝ過春来

時時宮

立春

小海

赤彦

作者知

春上二

たまえ天　後法性寺道家

たまえ春日　摂津

たまえ雪　後伏見

たまえ風　新院

たまえ春霞　読人しらず

海辺たまえ　交幹

たまえに　後頼

たまえ湖　好忠

たまえ池　京極

たまえ春若　後恵

たまえ川　国信

たまえ水　肥後

たまえ山　西行

山寺たまえ　後鳥羽

郷たまえ　常陸

関たまえ　小侍従

名所たまえ　後嵯峨太政

鎌倉大臣

後宋

宗守

吉野の花　　去天応
初美　　順

初美嶺　　かぜたち南門
　　花山院

初美山　　赤染衛門
山寺初美　　西山院
里初美　　定家
野初美　　長実
　　惟宗
　　左近
　　信川
　　乙麿
　　後人不知

初春雨　　順
初美雪　　和泉式部
　　長谷雄
　　日
　　清原
初美衣　　元輔
早春　　弘仲
　　西園寺
早美鶯　　後人不知
早美雪　　紫式部
　　大輔
　　又つね
　　好忠
　　上東

早春望
早春待花
早春眺
春水
春氷
春雪を解く
凍春を待
北清田地
春風解氷

春上五

早春望
早春眺
早春待花
早春眺
河早春
澤早春
早春山
山寄早春
故郷早春
野早春

小寄
定家
作者不知
長能
りそへ
重房
信茂
伊綱
ゆきかき
入道前摂政
好忠
式子内親王
也方
式子内親王

白馬節会

子の

子の松

雪中子日

嘉中子の

海邊子日

野子の

禁中子の

春上六

霞こそは
子は儀興
子は祝

子は述懐

野のひとる野べのふもとの氏うぢて年のとぶく君ぞらぶき　通俊
月　つまのひとと君の殿ごとふ霞われば松ぞもるべ人ぞ　秋浄
接　松のこふ鶴うぐひすの春ぶとそ年のはじめとぶ　女内
月　い来しなのはのたなりは君ぶるを世ぶいんとぞ思ふ　三条太政大臣
接接　神ぶ世ぞ君れぬふ松ぶいばれもうぶ花ちのうぶ　在大臣北方
月　霞さへ松ぶのぶ松うれぶそぞ君ぶるはぶ　前伊
月　君ぶ代ふ引てぶれぶなぶ日とる松ぶるみ世の霞ぶ引ねぶ　公実
月　君代のぶ引よ君ぶひとれぶなはのれもうぶみやせむ　赤染衛門
千　ゆく末をまつぞ引ぶよ君ぶんちの始のわの日とぶば　肥後
続　姫ぶまつぶ引る殿ぶよ君ぶ日ぶ引ぶ世ぶ引ぶ　道済
代　ふ年ぶる君の松も君ぶ代とぶ引ぶ世ぶ引ぶ　宗俊
接　松ぶるぶ引ぶ引ぶ引ぶ神のぶ引ぶ引ぶ　能宣
月　世ぶ引ぶ松ぶ引ぶ引ぶ引ぶ君の初ぶ引ぶ引ぶ　公任
ふ　ぶ引ぶ君ぶ日ぶ松ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ　[illegible]

殿

代　かぞへれば松ぶ年ぶ君ぶ人ぶ引ぶ引ぶ　文範
接　よ引ぶ山ぶ峰ぶ引ぶ君ぶ引ぶ殿ぶ引ぶ引ぶ引ぶ　重之
千　ぶ引ぶと君ぶ引ぶ引ぶ松ぶ殿ぶ引ぶ君ぶ引ぶ　俊頼
動　霞ぶれ引ぶ引ぶ引ぶ君ぶ引ぶ引ぶ霞ぶ引ぶ　信明
月　ぶる引ぶ殿ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ　定家
代　ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ春ぶ引ぶ霞ぶ引ぶ　資子内聖
月　ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ霞ぶ引ぶ引ぶ　橘津
動　ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ人ぶ引ぶ引ぶ　資隆
月　梅ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ霞ぶ引ぶ引ぶ　伊家
代　ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ霞ぶ引ぶ引ぶ　信明
月　ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ　定邦
代　ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ　師俊
動　ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ引ぶ　師光

懐霞
霞知矣

空霞

春暁霞

朝霞
夕霞
山霞
遠山霞
山路霞
嶺霞
羇霞

代 なつかはぐさ夏のの朝霧さらも又えも、きらつ石浪
方 うづもれしの夕さらそれ〳〵のかぜぐ光けふ霞うるら
代 いせの海やわうの原する只霧えうい出御く煙とぞ見る
方 ふるこぐ氏は者白山ふけるきれば木のら岸そ霧梢し
月 ふるこぐ氏は者白山ふけるきれば木のら岸そ霧梢し
接 よしの山ぞ霧のつ〻れら人うしれね霧やみて霧
重 梓弓けるのそ〻きふ霧ゆるうちきの山く霧走れびく
勅 みるら氏は者〻まれば者梅のうづきうよ夜みてなし
方 とれハとけうふ霧わくてみ霧る遠きうびく霧里れら
代 久へこの霧みふ者の立わまびそうそ霞む天のうぐ山
月 いかぐとぬんのとうう又渡せば大和霧山霞うるら
接 ふかはうれうてよの山のろ〻霞のうちふゆどみうふ
代 峰うに氏者月の山のける霞きみよのくぞ立ろうけも
月 みるのらふすくぐうの横霧ちるの枝のうれうくそ

法性寺入道
作者不知
土御門院
家持
作者不知
中務
長実
藤原右大臣
中臣氏の自
反歌
入道太政
安法〻
村雨
仲正

霞岳山
霞隔山
霞隔遠山
霞隔山樹
山家霞
里霞
野霞
原霞
行路霞

代 はるたちそはどやをなやうちもうの山い霧ふうどれるら
千 ふ〻ろ世ばそさとちるの枝ものすゆ夜みのうちやこうの山
月 さうるのふうらみそうふ〻ろ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
千 そうるれば枝のちすもうえねら霧ぞうそる三日の山
反歌 者ハまづ霞うまぐ〻氏立ようそうふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
方 はるる霧をふとうふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
勅 さびしさの色霧の霧うちのうに夜みぐ〻のむ霧のふ〻と
反歌 ちるるとふ野ぐのけうきのうちねハすぐ霞や立霧うん
方 野ぐるる氏人やうるとそ霧ふうむ家を霞のうちうる霧
月 うぐひすの羽ひ氏さむ〻かうぐ野のうちみの花とや立うん
代 氏ぐどり霞うちうる石ふうる野ふうえ〻ううの枝枝
月 ふ〻ろ世ばの峰の者ふ霞消てわううの原ハ霞者ふ〻
月 はるのうちわうのうちうのうちのや〻霧月氏者ふてで立霞行る
接 ふ〻ふ〻とわうそうそゆくう氏霞ふううびる立ふ〻ふ〻そ

重之
滋房
弘昭
頼輔
遍照
ふ〻ふ〻
少将
滋経
野ろ
徐ふふ知
隆信
匡房
侍従乳母
はうゆう

晩春霞　　詠人不知
関路霞　　俊成
霞隠遠寺　　隆季
郭公　　敦仲
郭公　　隆信
霞　　能因
霞　　隆衡
霞　　経盛
社頭霞　　俊経
霞隠古寺　　仔細
郭公　　以仁
郭公　　成範
霞　　清輔
晩春隠浦　　俊成卿女
海辺霞　　巨房
水郷霞　　範玄
春隠水郷　　隆季
海辺霞　　敦仲
浦霞　　隆信
晩春隠浦　　能因
海辺霞　　隆衡
春隠行舟　　経盛
江上霞　　俊経
湖上霞　　清輔
春上九

河辺霞

橋上霞

桜原霞

松上霞

霞隔松

霞隔遠樹

霞袖衣

寄霞述懐

寄霞懐旧

勅　紀戸わたりとうみの里小さ[illegible]れば霞もむせぶ宮居の川ぶみ

月　わきもこ[illegible]の川せ[illegible]の霞ようづれ[illegible]

後　岩川の[illegible]金吹吉海の中[illegible]

勅　かつらの背のまゝの[illegible]

代　[illegible]

月　[illegible]

代　[illegible]

月　[illegible]

古　[illegible]

千　つぎ[illegible]

勅　木のめ[illegible]

千　[illegible]

後　紀[illegible]

後成

頼輔

孝善

慈円

長方

家隆

詠人不知

為忠

定家

[illegible]

巨房

好忠

仲正

源助

[illegible]

勅集

待賢門

久待賢門

[illegible]

万　梅ぐ[illegible]

古　[illegible]

拾　青柳の[illegible]

月　[illegible]

月　[illegible]

六　[illegible]

代　[illegible]

古　[illegible]

拾　[illegible]

代　[illegible]

月　[illegible]

月　[illegible]

月　[illegible]

月　青柳の[illegible]

古　[illegible]

修蓍不知

詠人不知

足[illegible]

忠房

[illegible]

[illegible]

惟保

言直

素性

[illegible]

古大[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春来ぬと聞

早蕨

初関蕨

関蕨

年こゆ蕨

對窓関蕨

蕨糸春

蕨先生

山蕨と赤もち

古巣蕨

新　岩川の打出る浪もこもりてそ蕨もえけるれもえぬ　家隆

日　ひるまぬとたちつゞけの山ぶもぎしらくり蕨のこゑ　なみくれ

日　山里ふもとの人もとぶらふ蕨のゆゑあるとゆびをれよたぐ　おすしく

代　蕨の春の紙はるとはすくれどもものもすゆかどきよう　公任

日　花もそ蕨ゆきハ花もそもじゆる蕨ふるとうるぬまぐハ　拙稿参考

古　まきわとくいつゞる蕨のうるぬ沼ハわしとゞ、ふるよ　忠岑

新　いぶしの花のうたものいるれや春紙ふる蕨のうまく　堅子内親王

代　蕨の春ハおとゞわしの山の春こそ下ぎえうれん　元輔

日　春ぐさをみ春をうしそ紙泳ぎくゆゆ蕨の春　なみくれ

長橋　ぼる立て峰の蕨紙蕨のゆちわやくいそ紙出せん　おすしく

日　山ぶとみ蕨ふるとゆちう蕨のいづる初のけくゆゆ蕨　能宣

行　光まちふ春ふ春まちえふる蕨の初の紙わやなくゆ蕨　乃命

重　ゆゆやさは蕨ふとみて蕨の紙よいづる初音ゆゆもむ　弘輔

強　春ふゞきくうゆゞれのうるゆち梢ふうる蕨の春　八条道

代　人もとゞもちゆ蕨ゆゆ蕨の春紙ふ春ゆ蕨ゆ　兼盛

千　ぼるとゞ蕨の春ふ春ゆ蕨ゆ蕨ゆ今ゞ蕨ふ蕨　弘經

代　ゆるゞとふ蕨紙わくれとゆ蕨ゆ分みむ蕨ハ蕨の蕨　也実

日　年紙ハてきけゞもわゞゞ家蕨の花ゆ春紙ゆ蕨ゆ春　政長

日　うゆの蕨蕨わるゞゞよゞゞ春ゞゞうゞくくとゆきハ蕨のゆく　仁和法華

日　とゞとゞゞかゞゞわゞのハ蕨のゆゆ蕨わる春ゞゞゞゞゆる　宗教

日　蕨のゆゆちゆ蕨ハゞゞゆゆ蕨ゆ蕨ゆゆ蕨ゆ蕨ゆ蕨ゆ蕨ゆ蕨　土佐守源

古　蕨の蕨ゆちハゞゆる蕨ゆゆ蕨ゆゆゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ　千里

長橋　蕨ゆゆる蕨ゆゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ　源人之朝

新　ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ　後頼

代　ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ　兼盛

金　蕨の蕨ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ　弘季

日　蕨ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ　資業

後　蕨ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ　なみくれ

若号
雪中号
雨中号
霞中号
霧号

惟明聖
順
菱麗太政
多子
吾郎
素性
[illegible]
通助親王
恵基
読人知
後頼
奥風
公任
雅兼

[illegible]
[illegible]
[illegible]

里梅　　実綱

閑花梅　　ほうせん

樹高梅　　長実

梅間梅　　家持

梅の梅　　忠見

梅の梅　　高階人

弁林梅　　友平

柳上梅　　信光

　　紀忠

　　高倉

　　後恵

　　左京

　　伊衡

　　作者不知

金

けふよりや梅のこずえに鶯の初音里なるうぐひすかな

新

ひとのぞ見ぬ花の色香に鶯のなれしなつかしうぐひすかな

日

さびしさはたとへんかたもなきものを人をとはばいかがこたへん

万

あかねさす春の日の光のどけきに散りまがふ花のあはれなるかな

代

春の日の光のどけきに散りまがふ花のあはれなるかな

万

ひさかたの光のどけき春の日に散りまがふ花のあはれなるかな

千

春の日の光のどけきに散りまがふ花のあはれなるかな

古

うめの花うたがふかたにまがふらむ色にしるしの人の袖かな

代

春の日の光のどけきに散りまがふ花のあはれなるかな

日

鶯のなくなる谷の風のうちに散りまがふ花のあはれなるかな

日

鶯の谷にはなくとも春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

日

けさこそは春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

伝

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

万

あかねさす春の日の光のどけきに散りまがふ花のあはれなるかな

春　上十三

日

ひさかたの春の日の光のどけきに散りまがふ花のあはれなるかな

伝

妹が家のそばの梅の花ちらむうぐひすの声

新

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

古

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

新

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

万

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

古

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

代

鶯の谷にはなくとも春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

古

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

代

けふのみ春の日の光のどけきに散りまがふ花のあはれなるかな

新

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

伝

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

日

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

万

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

千

春の来ぬるとしらせ顔なる梅の花かな

　　行

　　義子

　　道綱母

　　素性

　　読人不知

　　同

　　真風

　　隆房

　　丹後

　　紀貫之

　　紀貫之

　　紀貫之

橘若葉

贈人の葉

雪中若葉

卯若葉

原若葉

殘若葉

澤若葉

田若葉

花所若葉

故郷若葉

名春採若葉

春若葉祝

春若葉述懷

春上十四

山春雪

野老雪

岡春雪

木老雪

江老雪

春雪似花

老雪歌情下

寄老雪述懷

残雪

野梅雪

山家残雪

故郷梅雪

草残雪

木梅雪

樹花降雪
降雪似花

山殘雪
除寒
降雪月

山降雪
梅

自根ふる花をうれはしがるこの君のむしまぎえ　仁和寺法皇
ん　ぶ　し　ふ　く　そ　ま　そ　し　ど　を　な　れ　ば　消　わ　ん　ね　の　君　の　花　こ　ん　ぬ　ん　な　に　は
梅　家　君　の　梅　ま　し　ひ　そ　み　よ　ま　ま　の　ら　の　ま　の　ま　な　れ　た　る　な　ま　の　ふ　ん　な　に　は
の　の　の　

雪中梅　作者不知

梅似雪　赤人

雨中梅　信明

梅風　家持

梅花香　隆房卿

梅花遠香　清輔

梅花待風　後鳥羽院

梅花香　小宰相

梅花　内侍

梅花香　東保

梅花　崇徳院

梅花香　りゑ

梅花　經雅

梅花遠香　読人不知

梅花待風　内

梅花香　閑院左大臣

梅花　以

梅花遠香　久我内大臣

梅花　隆房

梅花香　清基

梅花　後頼

梅香何方　　兼盛

梅葉袖　　前太政大臣

梅袖神香　　素性

梅香梅袖　　忠度

梅香為袖　　有房

梅香陸衣　　通重

梅葉袂　　読人しらず

梅香入閨　　伊勢

梅香夜芳　　大内御歌

梅花葉　　懐子

夜梅　　式子内親王

梅ぐいもの宿りはいかにとしたまもやのはらふひとりとむるも
金うめぐいもよりはいかんものあたいとうねさくらもいやはるる
陸　ものよりはいかにはるるとうねさくらもいやはるる
月　梅のまとりはいかにもこんにちのふるまいにはるる
代　はるとうもやこんもうぐいもうるるまいにはるる
月　わうめはるとうもやもどうんうめはいにはるるうくるるのはるば
月　一方おかしいうるうめとはるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる
古　ものよりはるるはるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる
反歌　うるるのはるはるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる
古　月はるはるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる
代　はるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる
月　うるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる
反歌　梅花葉はるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる
梅花葉はるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるるくるる

閨夜梅　　後頼

花梅琴香　　長房

梅　　読人しらず

梅　　慶律娘子

朝梅　　[illegible]

夕梅　　[illegible]

月の梅

梅花不逢春

梅庭梅

社頭梅

古宮梅

古色梅

故郷梅

山梅

千
するのよはれるの梅ぬりの月の光もかはる人はそれ　後鳥
梅花ぬしいかうと他のとふれる月のみぞわるそ　定家
月うめの花わねをもも昔をとすぐるこみの色の紅は　後嵯
大宮の梅のちひろ屋ちらをそね春はよの月　定家
いく里の月の光もかはるとん梅咲くこのみのもぞ　家隆
千ひとそつぐとん梅もそれらえねもの月　巨房
梅わてるかひもなく梅花をこのようにひまもて　寛信
神垣の昔つぐうめの紅もふ若木とかるる　經信
するの月ふもしてやひもるる津のあまのけ梅ぬ　四条延
梅ちらふぐるいかもよ梅紅わすすそ色ぬ　菊池太政
すぐれんかもしりげかはる花の梅ぬ　武子内堅
梅波ぬふ咲や昔の梅ぬいまもるる海風ぞく　後京極摂政
代ぬれるも昔ぬとんるの月の梅ぬ紅れ　鎌倉右大臣
後梅梅ぬ垣ひまるはくこ里ぬりうこのんぬぞる　家助

簾端梅

庭梅

垣梅

園梅

梅花遠香

梅有梅

り梅梅

梅者蜂蝶

月うめの花ちらはるの人はそれわるうれ　実平
陸ちつまる春のみこそそれ梅のちぬ花ぬ若ぬ　國基
彩すぐれるけ人昔ぬ梅わ梅ぬ梅ぬ紅ぬるる　武子内堅
動ぬるうぐ梅の色梅ぬもとそれるわるもぬ河ぬ尾　信定
後鳥一ぬ者の垣ぬの梅れぐうぬ春ひとうわせぬ紅れ　後人ぬ知
代梅ぐえ人梅ぬそれぬ垣ぬ梅ぬ梅ぬ紅れ　經信
万ぬ春ぬ咲ぬや昔ぬるうぬとぬ一の園ぬ梅ぬ紅ぬ　大道
月紅ぬれくいぬ我園ぬ昔ぬ梅ぬ色ぬ梅ぬ色ぬ　也手
ぬ一ぬ者の梅ぬぬのぬ梅ぬ梅ぬ色ぬ梅ぬ色ぬ　ぬ人ぬ
月梅の色ぬひ紅ぬのぬ色ぬ梅ぬ紅ぬ若ぬ色ぬ　ぬ行
彩わすぐぬ紅ぬぬぬ色ぬ梅ぬ紅ぬぬぐぬ　敦家
金我ぬぬぬいぬぐぬぬぬ梅ぬ紅ぬぬぬ　則光
動ぬぬぬの色ぬ梅ぬ梅ぬ紅ぬぬぬ　家良
金梅花ぬぬぬわぬぬ紅ぬぬぐぬ紅ぬぬ　良暹

梅の花を折る
野梅
杜間梅
名所梅
梅花稀に
梅香稀に
水畔梅花

見梅
独見梅
依梅待人

月 けるの枝は雪ハ花をもりそこなるもちゆる梅のうたいす
後撰 をへて雪花のこ梅さくばかりの人もつとまとまれり
拾遺 うめぐえ紅なるふきれ梅人やわるを此の花に立く次ふ
月 枝ゝ次梅のえれ紅咲ゝらわせ梅ゝ梅のわ色ばの
古 うめの花ゝ梅ゝ梅ゝ梅

折梅

折梅遠人

梅花

惜梅

庭梅

惜梅

梅花雪

作者不知

素性

貫之

信実

貫之

後人の歌

作者不知

後人の歌

島倉

重中

文保院

文保院門

康資王母

祐恒

元輔

俊成卿

作者不知

家隆

後鳥羽

重中

後人の歌

後鳥羽

後鳥羽

家隆

後鳥羽

後鳥羽

後鳥羽

寄柳述懷
寄柳懷旧
柳

柳玉
柳絮
吉柳

雨中柳

柳影水玉
霞有柳

春柳
柳風

柳風静
柳乱風

柳糸遊風

禁庭柳
関所柳
山家柳
故郷柳
水底柳
河竜柳
池底柳
柳陰池水
柳陰池水
柳糸吸水

金
風ふけば柳の糸のたちふるまひてさらにうれ
新
古葉や大きなるのもあるべし
雑
ぬるまはしたれてゆきなどもあるべし
日
ふるさとの岩のあはれ
新
山陰の宮居ふるさとの柳
代
故郷の古塚の柳をぶくとたゞ淺みて淺らぬ
代
者ふるさとの新のもの柳をふるもいきふるら
新
ゆるせる六田の淀の柳をうゝみ
万
おのゝ行るたびの糸のもの柳ハとゝまべとうちふるる
後
もの日て新きゝ池の鏡ハ柳のあをまゝいとえる
重
風ふるべ波のわやゝる池あふ糸しなる峰のもの柳
日
なべ吹ハ波のゝ新うる柳のもあゝ出ぶれける
長雄
池のゝ新ゝ柳のもゝ出ぶれける
六
みのゝ新おるゝ柳波のわやゝる糸とゝる

院后製
さぬき
読人不知
赤言
西り
遊屏
宗砌
経
坂上郎女
家人不知
雅兼
貫之
経衡
読人不知

呼柳
宮柳
行幸柳
遊柳
遠柳
柳糸
柳垂糸
揉頭柳
敬柳
宮草

新
吹ぜ小ぶでれぬ呼のもの柳ハいとゞ浪さゝれぶなるなり
代
ぜ吹ぶ浪ものの岸のもの柳ハ波ゝ出ぶれる
日
宮風の吹とふたるる柳枝のいとゝもゝ
新
うらうゝびきもはきふゝうもの柳ハ
後
ふるゝてゞ色ハ浪ゝるもの柳の糸ハいとゝゞるゝ
新
宮風の吹とく吹もゝ乱ぶゝゝびくもの柳の糸
新
浪ゝゝ浪てゞゝるゝもの柳の風ゝもゝ
六
ゝゝとふ浪せゝのハ者柳の風ゝゝ出とゝ糸ゝ
日
つゝ君のゝとゝふゝゝるもの柳の糸ゝゝもの
後
宮の糸ゝゝるゝゝ柳吹ゝゝゝゝけるのゝ山ゝ
六
糸ゝの吹ゝゝもゝ柳ゝゝゝゝゝゝ
日
石葉の大ゝ人のゝゝゝゝゝゝ柳ハゝゝゝゝ
六
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ者柳の糸ゝふゝゝゝ
代
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

中務
家持
読人不知
高遠
経宣
大輔
はを
丹てて
定邦
読人不知
ゆく力き
作者不知
貫之
出羽

美濃
右京大夫

恒根
山路美草
野美草
聖子
藤

早蕨
壮蕨
山蕨

春夜月
春花待月
ほの春月
不眠不論
春更月
霞踊月

春山月　　小式部内侍
素暁　　宮一春
素暁を　　入乃天の撰歌
春山暁　　秀歌
山寺素暁　　定家
山辺素暁　　隆信
遠村素暁　　定家
　　俊光
　　六条
　　前園
　　忠良
　　定家
　　六条入道
　　実敦

代　たえても絶えだえの野の山もの花咲ぬるもの枝のみどる哀は後の夕べ
月　山月は影なかるる哀は後の夕べ
月　三笠山もの花咲ぬるもの枝のみどる哀は後の夕べ
千　もの枝の花のうつろひもさもわびあれたる分のむしの暁の哀
形　しるのの花の夏のうき橋を横きのそら
代　ひとすがくれんうきやる鶴ひとき鳴のそらの
月　ひとすがくれんうきやる鶴ひとき鳴のそらの
勅　山の端も空もひとつにあかつきの暁
月　時すぎぬるのいろの木枯をつるけるれ暁
形　天の原ふじの煙の色の哀るびくわるびくの哀
代　花咲しむ山のそいふじとふ名をうる暁のそら
勅　名をうる峯の嵐も名をうる山のこずの暁のそら
月　月新の情ある山ふかの花も哀ゆるけるのわるびの
月　紅葉の枝の嵐も哀むしうとぶとの哀

家隆　　小式部内侍
俊人不知　　宮一春
月　　入乃天の撰歌
巨房　　秀歌
以上　　定家
ちとせ人の　　隆信
宮内卿　　定家
国房内侍　　俊光
基良　　六条
月　　前園
行尊　　忠良
撰歌　　定家
保業卿　　六条入道
八条天皇政　　実敦

秋　夜ふかの雨を横きのそら
秋　夜ふかの雨を横きのそら
月　夜ふかの雨を横きのそら
夜　春の夜のうたかたの雨ふかの雨を横きのそら
千　春の夜のうたかたの雨ふかの雨を横きのそら
形　春の夜のうたかたの雨ふかの雨を横きのそら
代　春の夜のうたかたの雨ふかの雨を横きのそら
月　春の夜のうたかたの雨ふかの雨を横きのそら
月　春さめの雨ふかの雨を横きのそら
月　時雨ふる雨ふかの雨を横きのそら
月　月ふかの雨ふかの雨を横きのそら
形　ふかの雨ふかの雨を横きのそら
代　春の夜のうたかたの雨ふかの雨を横きのそら
形　ふかの雨ふかの雨を横きのそら

夕暮雨
夜暮雨
山暮雨
林下暮雨

野辺雨
山路春雨
読書雨
閑井春雨
寄書雨懐
帰雁

春雁
春暮帰雁
別花
帰雁惜
雨中帰雁
雨中帰雁哀

高遠
五月雨
七夕
作者不知
行基
九条兼実
伊勢
後人不知
舞乳母
経通
俊乳
資賢
考御
貫之

経信
丹後
資保
馬内侍
忠季
阿波
俊左衛門
定家
統基
[illegible]
[illegible]
知通
帰時

千閑伯爲　　帰氏
菅天陽爲　　通秋
你交伯爲　　侍人ふぞ
曙陽爲　　信宗
月芳伯爲　　寂蓮
伯爲仙宮　　國基
陽雁幽　　良經
伯爲遠　　滝信
遠陽雁　　亦信為
伯爲少　　宗仲
遠山伯爲　　孫補
峯伯爲　　重中
海陽爲　　重方
　　頼政

秋人道の濱ふうち浪るぶ屋り絶えて人ふらがな
返抜かりぶけ　ぶ　ふ　ぶ　ふ　ぶ　ふ

雉

岡雉
藪雉

焼野雉
原雉
雲雀
呼子鳥

呼子鳥
夜雀呼子鳥
山呼子鳥

関路の春
森の春
深山の春
墓着の春
花さかぬ間

代 春のよりさくらの山ゆる春をまちいでぬ人も春
古 いたづらに越えんとすれば一ゑの山路をゆくも
月 山ぢ花ゆえなかぬ春をまちつるれ
月 春の海のうらなみの春をまちつるうらぶれ
千 うつくしきもえぬ春をまちつるうらぶれ
形 よしいとよりの春のおくの春をまちつる
古 ゆくすゑのたづきもしらぬ春小ぶねこぎ
代 春をまちつるうらぶれ
古 人より春のうぐひすさけの梅花をまちつる
月 もとをまちつるうらぶれ
月 梅花ちりくれ春のうとうるはしかぶ
後 ゆかしきもせむ梅花白ひあるねふちるうらぶれ
後 春をまちつるうらぶれ
後撰 ちぶちぶわるむ梅花わるねんいたるうぐひす

鎌倉右大臣
要文
童保
信敦
道房
幸清
後人不知
美濃
友則
後人不知
業平
敦忠
千景
業忠

若木梅
若木梅

月 知るまだき雪あるしぶるうぐひすの花をまちつるうらぶれ
月 さくらの小ぶねこぎてうぐひすの梅の宿
月 山梅をまちつるうらぶれ
千 さく波やまぢのいろ咲きぬ
古 百ふるこぶねこぎてうぐひすの梅花をまちつるうらぶれ
月 宮つるはさくらいでぬ梅花をまちつるうらぶれ
月 とりの人の家ぬぐふをむいろ花をまちつるうらぶれ
月 ちるは雪ちるぬはやをよぶつ花をまちつるうらぶれ
代 流るはわるうえをむ春はまちつるうらぶれ
月 梅花咲ぬ日ちるぬのをまちつるうらぶれ
月 ぬぐ波の人のいろわるんわるいるる花の白ひるるうらぶれ
月 きけばちる花の宮花世とふるまちつるうらぶれ
古 ことしもまた初る梅花ちるとふるうらぶれ
千 ぬる波の花ぬぐふ山梅花は老を春をまちつるうらぶれ

一本紀伊
出雲
丁実
乾細
はるの紀
三つね
右大臣
勝命
おほ式部
元宮内卿
能季
後家
丹大
仲正

八重櫻

京櫻

緋櫻

鬱金櫻

物

年ごとにさくる木の櫻花つぎつぎにもむ

代きてのみかもし若木とかりそめにきのふとぞ思

詞 ゆく〳〵のうつれる春の八重櫻今ぞこの世の白ひとえなれ

形 ちりつもる吉野の山のやへさくらいにしへ花とうたはれけん

反歌 吉野山峯の白雪のちりかかる花櫻かな

詞 ちりのこる花ざくらかとみるまでに八重にしられぬ色とこそ見し

月 山ざくら白だつなれど紅のうすぎぬ重ねむすびみつるかな

月 花びらいとぎりへのわてこそ後こそ櫻ぬるもいでこそ

月 樣ちりのこぶくさちらすえねひざのの花

形 櫻花わてそれもうちわるちらねけぞもすゑ

月 ちりわびぬあまぎりもいもやのよふぶるのちねぬ花の白づ

動 宮ぐるもうくるの櫻花のどかきこそるわまるのひと

月 ちらひらも花のどかきぬ花づかちらねるの花とるる

代 花のうちいのどかきもの京のうらうら

重時

後鳥羽院

伊勢大輔

左命

清少

康資王母

京極為兼政

能恒

讀人不知

忠家

經信

堀川右大臣

信家

堀川右大臣

待花

月 いたとうにうつり散のこの山の白雪と花ぬけるでやうはらいかも

代 しぶそてもいりぬ花散てはとりもしぬどをいふせもあるう

月 ふる雪のわもつくうつ白雪にいふせもあるう

月 いたりしくえもくけさいに雪後白雪のこの櫻ちるうら

月 いつしか花ぬちりぬとしりるきせとしねわをちば

後 花ぬちりぬとしりるきせとしねわをちば

月 花をもる花をくれぬさるわびいく散消ぬるのうらを

月 ちりわる路の櫻を消ぬどいれもすとそもわうちるもる

反歌 このあれ晨こちる山里の花ちりぬ

月 ちれくの分ふるそぶきんさ花咲ぬどいわぐれうら

月 げつるまも雪消ぬどのるぐさ泳そ一つ峯のうちを

形 ちうちわやうちある雪消ぬ白ちねちぬ花ぬるぐく

月 ふる里小花いちのちくすり野の山の櫻いまぬ咲ぬけな

代 ちとうなるぬとかーと見しの山の櫻いまぬ咲ぬけな

第後

恵慶

為相院

こ条院

崇延

第輔

聖印

也尚

中臣

崇延

内大臣

才路

小持

為相

斬待花

鼠待花

山家待花

関中待花

待花遅開

山花遅

山寺に遅し
山家花遅し

経忠

金山桜ごと咲の風のさむしえんぶの花のちりかなをぞ思ひこし
野ちりてこそさそはえんと思へ小日数へつるけるのいぎと
いたぬ山ぶきぞ小はぎと小はぎとぞ思ふ花は咲きぬ
枝花の末をとうしもちくもくれぶ春若をぞ見てりんぞ
代つる和い世のまことも花ぞ思ふ
千もぞ思ふ春の横雲つ引て松ん上を山ぶ
歌ぶ春のあて花のもとを思ふものぞ指ぞ
終風ぶ吹ぶ山べを思ふ花を思ふ山ぶ
月花を思ふ春ぶ花ぶ思ふ
代花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
嘆ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ

隆房

春ぶ花ぶ思ふ

重盛

桜ぶ思ふ

奥平野生

尋花

歌ぶ

尋花ぶ

歌ぶ

遠ぶ山ぶ

歌ぶ

遠ぶ山ぶ

歌ぶ

弘昭

基通

忠良

崇徳院

後成

山路ぶ

歌ぶ

歌ぶ

雲ぶ

歌ぶ

尋花ぶ

歌ぶ

遠ぶ

歌ぶ

歌ぶ

遠ぶ

歌ぶ

月花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
野ちりて思ふ山ぶ思ふ
千咲ぬ山ぶ思ふ
月花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
重花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
歌ぶ花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
月花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
代咲ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
月花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
歌ぶ花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
千花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ
月花ぶ思ふ春ぶ山ぶ思ふ

弘安

西園寺

摂政

重保

貞輔

白河院

久我大納言

有房

小納言

為家

隆祐

宗仲

後嵯峨

大進

雨中遠花
遠樹天間雲

遠見花

遠遠見雲
初雲

花初開

小初雲

[illegible]
[illegible]
[illegible]

見雪

見盛花

月前見花

雪下見月

雪見恋

鶯見恋

朝見花

毎年見月

堅間見花

隔年見雪

見雪は春

常に見の月

毎春見雪

年ごとの花

毎年見雪

後拾遺 桜花をしくれなむ春の形見にと思ひ出でつつ見るぞ悲しき　伊勢

千代 いまも花さかりなれば思ひ出でつつ見るぞ悲しき　清正

拾遺 ちりぬべき花をもとめて思ひ出でつつ見るぞ悲しき　太宰帥長政

千代 おもひ出でつつ見るぞ悲しき　中務

後拾遺 散ぬべき花の形見とおもひ出でつつ見るぞ悲しき　兼盛

千代 桜花散りぬる時にあひぬれば思ひ出でつつ見るぞ悲しき　馬仲

後拾遺 散ぬべき花の形見とおもひ出でつつ見るぞ悲しき　白川院

千代 咲ちりぬべき花の形見とおもひ出でつつ見るぞ悲しき　源縁

後拾遺 散ぬべき花の形見とおもひ出でつつ見るぞ悲しき　基俊

千代 かひもなき花の形見とおもひ出でつつ見るぞ悲しき　信実

勅 桜花散りぬる時にあひぬれば思ひ出でつつ見るぞ悲しき　時房

千代 散ぬべき花の形見とおもひ出でつつ見るぞ悲しき　源縁

千代 散ぬべき花の形見とおもひ出でつつ見るぞ悲しき　永原

千代 年毎に花さかなれば思ひ出でつつ見るぞ悲しき

見雪志津ノ
見山花
越山見花
遥見山花

旅中見雪
り話ス花
馬上見雪
名所見花
入隣家ス雪

見雪忘樽ノ
枕見花
老見霞
見雪忘ル
見雪思者ノ

思花

春上三十四

里家花
京都歌
思樹の有花
思郷の花
不忘思歌
思山花
遠思山花

思山里花
夜の山花
盛花思花
遠思花
老人思歌
競花

春上三十五

歌山花

終日歌山見

禁中歌合

見者寄梅

雨中歌会

歌会絶年

為年歌会

花歌合

愛花

代 ふるさと昔の春も白ひさむたぐひてうえぬ花梅小

新 ら賀山桜しも山ぶかく花さかばまいわくるこずえとも

社 ひくら鶯をいつものぞらの春ふ日もわわるこ

実 九重ふかくしく白雪の中梅のどれをの花をのぶるこずや

後拾 ひろくふかく花のたくそのかうれんぐいいものとそのこと

後 ひるるの花の枝より流れこぶ紅そねれあ者ずやうると

新 言れ家ものくの花ぬえて海亜ん逆ふれるこ者

後 ふ家ものくのたれ花ぬえて海亜ん逆ふれるこ者

代 ものくのたれ花ぬえて海亜ん逆ふれるこ者

自

剛忠

對花

独對花

對花感懷

折花

元補

裏屋

[illegible]

隆信

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠寄絵字
遠見ニ家花更入
寄ノ天花
月ノ景

花ノ月

忘れぬ月
月入花殿時
寄雪嵐
荘雪

山の白雪をいかにうたはんとかやうに
法ど和ぞう卿は桜の白ひかり詠ぜられの花とうたん
歌はるいぐりはぬ雪ぞうをけ花の梢とうたぐ
代つんつるせば冬のたぐきか咲らんそれも白く花桜
手白雪と峰の桜ぐもわれる月の光いかぐ
月けるのうの月かいとうねぬ白ぐ花ら雪の山の桜うぐ
花ちらしいきたるうん雪ぞうかてせ雪のうの風
後わくうの月と花ぐ雪ぐいかぐうんぐうんせぐ
歌雪と花かうせるこのうち詠とうぐ山陰の月
代てる月も光ぐうよりうぐいかぐとふうぐま
歌いたれうもうまぐうの白ぐうれ
歌花すぐ白雪ぐうるぐきみう月のうれて入るる山の陰
詠桜ちるこの下ぐいかぐうれぬぐうる
月桜花ぐうく急ぐうぐうぐ消せぬぐうとぐうるぐい

要ぐ白
ぐ雪
真雪
月詠
城川
季慶
雪宝
信仏
特強
丹後人
お家式部
見別
要ぐ
桜庫

忘れぬ雪

寄風花

風雪花

野山桜うぐの下ぐ花ぐうう木のかぐれぐのひうぐえ
月ぐうぐ峰ぐ花ぐうう桜ぐうん雪のうぐ白
詠寄ぐう雪ぐ桜ぐうう木のかぐ白ぐ峰
月ぐう雪ぐ消せぬぐうとぐうぐえぐる峰ぐうき咲桜ぐけ
千咲白花ぐうわぐうぐうぐ絵せぬぐうぐうぐ峰
歌ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうれぐう花ぐう
歌ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう
月ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう桜ぐうぐ
月ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう
月ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう
歌ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう
月ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう
歌ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう
月ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう
続桜花ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう

鹿雪ぐう毎
強雪
月ぐう
ぐう人ぐう
基雪
山ぐう
童ぐう
歌仲
後雪
宗ぐう
ぐう毎
野信
牧補
歌ぐう

春風

風動花芽

花芽風

芽薫風

春風ヲ

熟成風

代 春たゝぬ何のわたりの春風の河むしろにふる花すゝぐ　伊勢

月 風さへぬるとてさびぬる梅花ゝとゝまりちるかすませで　同

古 ばるる風の我春ゆゑふく吹ゝ花ぞ思ふ花ぞこゝまで　行通

金 春ちかまいふふるゝ春風の花ぬれんとまぬ知ぬ　後礼

月 梢ゆゑ吹ゝ人えで梅花ゝ匂ふ春の風のゝ不ゝ　敦也

千 いばゝ春ゝ春ゝ春

[illegible]

[illegible]

[illegible]